

強い綱

中学校校長 河崎哲郎

2013年5月号

新版 第58号

編集:

駿台甲府高等学校

駿台甲府中学校

駿台甲府小学校

違うという前提と 同じという前提

他者を知るということは自己を知るといふことに他ならない。このことは今までにことある毎に実感してきたことです。特に外国語を学ぶということはその国の文化、その国の精神を知ることにはかならず、それはそのまま自分を知る、自分を発見することになります。英語を学び、英語の国の文化を知ること、自分を発見すること、日本や自分自身を知ること、余儀なくされてきた感じを持っています。英語は多くの国で話されている言葉ですが、そのおおもとは英国で、現在の世界の中で一番大きい影響力を持つている英語を母国語とする国はアメリカということになります。大きくまとめて西洋ということにしましょう。その時にはヨーロッパの諸国も含んだ先進諸国と言うとよいでしょうか。

外国に行つて道を探ねられたことはありませんか。日本では見た目が日本人ではない人に道を聞くことはあまりないと思うのですが、外国では外見に関係なく、道を聞かれることがあります。私もそのような体験があります。その時はなぜ白人の多い国で見た目が東洋人の私に道を聞くのだろうかと思いましたが、彼らにとつては見た目では外国人かどうかという判断はで

きないのです。見た目が違っていることに違和感はないのでしょうか。

いわゆる西洋と日本の大きな違いはいくつかありますが、私が最も大きな違いだと思っていることの一つに「違うという前提と同じという前提」ということがあります。一人一人は違う」と考えているのに対して日本人は「人間は皆同じ」と考えている、ということ。つまり、一人一人違うと考えているから、東洋人の私に道を尋ねたりもするので。

他者理解

違うという前提

最近日本もずいぶん変わり、外国人も珍しくなりましたし、バイリンガルの人も多くなりました。テレビではこんな世界の地の果てで日本人が頑張っているよ、というような世界の辺境で暮らす日本人を紹介する番組やら、アフリカの奥地に分け入つて現地の村の人と芸能人が交流する、といった番組をたくさんやっています。ずいぶん日本も変わったなあ、と思います。世界中がグローバル化の影響で均一化され、世界各地の間の距離も縮まり、瞬時に世界各地の情報を得ることもできます。そうは言ってもそれぞれの土地に暮らす人々にはその人々の特徴がまだまだ色濃く残っています。

先日横須賀へ行つて来たのですが、駅を

出ると公園の中に小さなバラ園がありました。見ながらふと思つたのですが、西洋はいわばこの色とりどりのバラ園で、日本は満開の桜並木のようなものかもしれません。バラにはいろいろな色があります。赤や黄色、白などなど。形も今は品種改良されていろいろな形のものがあります。一見した

ところはずいぶん違っているように見えます。一つ一つ違う花が集まっているようです。でも、どれもみな同じバラであることには違いありません。かたや、桜の花は一見どれも同じに見えます。しかし一つ一つよく見れば大きい花もあれば小さい花もあり、ピンクの色も少し濃いめのものから薄いものまで。近づいてよく見ると一つ一つ個性があり、まったく同じではないのがわかります。そう考えてみるとバラの一つ一つの花も、桜の一つ一つの花も実際はひとつひとつは違っているのです。

西洋人はバラの花のように最初から人は一人一人違ふものだと考えていると思います。そういう仮説に立っているとお互い話をする際にあなたと私は違うという前提で話を始めます。それに対して日本人は基本的に人間は皆同じものだという仮説に立って話をしている、そう私は思います。この二つの考え方は究極的には同じ結論にたどりつくのかもしれませんが、その出発点が違うと思います。まず人に相対する時に「相手は自分とは違っているのだ」という前提で話をします。そこでは話の展開と共に、「そうか、相手はこのことをこう考えているのか、それは、私とは違う考えだな。でも、この点については私と同じ考えなのだ。」というように相手に対して思うでしょう。かたや、「相手は自分と同じなのだ。」という前提で話をすると、話の途中で自分の予期せぬ答えが返ってきた時に、「どうしてそんな風に思うんだろう、おかしいな。」という具合に相手に対して不信感を持つたり、敵

意を持つたりすることにつながってしまいます。逆に同じ意見だった時には共感したり、結束が強まったりするということがあります。

二つの目を見る

そう考えてみると、相手を「違うという前提」で話をするには相手を認める、理解するという観点からとても大切なことだと思えます。同時に我々日本人は、ほぼ同一の価値観の中で「同じという前提」で相対することで、所属する集団の中で個を認識し、その集団に貢献することに美徳を認め、「一致団結」し集団力を発揮することに誇りを持っています。将来生徒や我々自身が日本人として国際社会で生きていくにはこの両方が必要なのではないかと考えています。言い方を変えれば、異なる「2つの目を見る」と言えるのかもしれませんが。

「・・・私は日本の近世の学者を一本足の学者と二本足の学者とに分ける。新しい日本は東洋の文化と西洋の文化とが落ち合つて渦を巻いている国である・・・時代は二本足の学者を要求する、東西両洋の文化を、一本ずつの足で踏まえて立っている学者を要求する。」これは、ある年、金沢大学の学長が卒業生へ送ったメッセージの中で引用された文章です。今からおよそ百年前、1911年に、森鷗外が随筆「鼎軒(ていけん)先生」の中で書いたものだそうです。文明開化の時代から百年の時を経て世界も日本もずいぶん変化しました。けれども森鷗外が日本は二本の足で歩かなくてはいけないと言つたように、我々も、ともすれば混乱しかねない様々な国との関係の中で孤立せぬよう、常に二つの目で見なくてはいいのではないかと思います。日々生活する中で、上手に人間関係を作っていくのと同じことなのです。

高校より

関東大会に向けて

男子ハンドボール部

顧問 八田 政久

先日行われました山梨県高等学校総合体育大会ハンドボール競技におきまして、決勝で県立塩山高校を39対10というスコアで下し、8年連続20回目の優勝を飾ることが出来ました。

3月に行われた全国高等学校ハンドボール選抜大会において2回戦敗退という結果に終わり、モチベーションが低下した時期もありましたが、「夏こそ全国で勝負できるチームになる!」という意識を確認し練習に励んできました。部員数も4月から3年生7名、2年生5名、1年生9名の計21名となり、選手全員で日々努力しているところとです。



今年のチームも個々の能力はありますが、「全員ハンドボール」をモットーに全国トップクラスの練習量でカバーしようと考えています。6月に行われます関東大会は23年連続23回目の出場になります。最大限の努力を重ねインターハイに繋げていきたいと考えています。応援よろしくお願いたします。

女子ハンドボール部

顧問 坂本 晴昭

先日行われました県高校総体におきましては、多くの方々からご声援を賜りありがとうございました。決勝戦ではあと一歩及ばず、6年ぶりに優勝を逃してしまいました。5月31日から栃木県で行われます関東大会への切符を獲得することができました。6年連続6回目の出場となります。1回戦では埼玉県代表の大宮高校と対戦します。一戦一戦全力で戦い、ベスト4以上の結果を残せるように頑張りたいと思います。関東大会の翌週からはインターハイ県予選も控えています。昨年はインターハイ予選で負けてしまい大変悔しい思いをしました。この関東大会で弾みをつけて、インターハイの出場権も勝ち取りたいと思います。今後ともご声援の程宜しくお願いします。

「山梨を元気に」

陸上競技部 顧問 三枝 幸雄

5月4・8・9日の3日間、山梨中銀スタジアムで陸上競技の部が開催されました。本大会が、関東、インターハイへの予選になるので、全国一早い県予選会ということになります。毎年、総合優勝ももちろん狙っています。関東で一人でも多く入賞して、インターハイに出場してほしいと願っていますので、関東大会の6月中旬にピークを合わせないとなかなか関東の厚い壁は突破することができません。関東への過程に総体があつて、調整なしで総合優勝できれば最高だと考えています。

今年も生徒たちは1人で何種目もの競技にエントリーして、大健闘してくれました。特に3年の寺本有那は5冠獲得でした。

2年の小田遼太も4冠です。リレー種目で優勝できないと、4冠5冠は達成できません。そのリレーで駿台女子の400mRは総体13連覇になります。男子の1600mRも11連覇です。先輩たちが築き上げてくれている伝統の力を継続しているからこそ記録です。来年2014年は南関東インターハイで、陸上競技は山梨県開催です。運営だけでなく、たくさんの選手が小瀬の中銀スタジアムで活躍してくれることが、山梨を元気にする特効薬だと信じています。今後ともご指導をよろしくお願いたします。

男子バレーボール部

顧問 半田 博志

先の県総体において第4位となり、5月31日(金)〜6月2日(日)に埼玉県深谷市で開催される「第67回 関東高校男子バレーボール大会」に出場することになりました。関東大会には通算で26回目の出場となります。昨年の新人大会では、部員が5人しかいなかったため他の部から支援をしてもら



つての参加となり、見事高校総体で出場権を得ることが出来ました。一年生の

力なしでは出場できなかったかもしれませぬ。この勢いを止めることなく関東大会に臨みたいと考えています。

以前より「関東を制するものは全国をも制す」という言葉があります。関東はハイレベルですが、残された期間、部員一同とともに練習に励みます。応援の程、宜しくお願い申し上げます。

ソフトテニス部

顧問 酒井 竜次

去る4月27日(土)、石和中央テニスコートにおいて、第64回関東高等学校ソフトテニス選手権大会の山梨県予選(個人戦)が行われました。

本校からは甲府地区予選を安定した強さで勝ち抜いた2年生の若月・白井ペアが出場しました。およそ120のペアが参加し、関東大会への出場権を得られるのは上位16ペアという厳しい条件の中、同ペアは2年生ながら1回戦4-1(対富士北稜高ペア)、2回戦4-0(対葦崎高ペア)、3回戦4-1(対甲府南高ペア)と危なげなく勝ち上がり、見事ベスト16、関東大会の出場権を得ることができました。続いて迎えたベスト8を決める戦いでは、第1シードの笛吹高ペアに0-4と完敗でしたが、良い戦いできたと思います。

関東大会は5月31日(金)〜6月2日(日)に、神奈川県小田原市の「小田原テニスガーデン」で行われます。若月・白井ペアが出場する個人戦は6月1日(土)、9時スタートの予定です。応援よろしくお願いたします。

中学校より

テニス部顧問 永山一宏

去る4月27日(土)に小瀬スポーツ公園テニス場で行われた第18回山梨県中学校テニス選手権大会団体の部において、本校男子テニス部は見事優勝を飾り、これによって県選手権大会六連覇となりました。一口に六連覇と言いますが、これは毎年のように紙一重の接戦を戦い、かろうじて得た結果です。

中学の団体戦は対戦校ごとにダブルス2試合、シングルス3試合の合計5試合を戦い、1試合を1ポイントとして3ポイントを獲得した学校が勝利する競技です。この5試合の出場選手は予め登録した10名のメンバーから対戦校ごとにその都度決めますが、選手個々のレベルや適性によってシングルスかダブルスに出すかを決めるだけでなく、相手校のメンバー構成や実力によって出場種目を変えたり、対戦相手の裏をかくような出場順にしたりと、試合開始前のオーダー決定に尋常ならざる神経をつかうこととなります。極端な話をすれば、実力が伯仲した学校が相手の場合、試合開始前のオーダー(メンバー表)交換の時点で勝敗の帰趨が決するとも言えます。実力だけで勝てれば言うことはないのですが、実際には運が大きくものを言います。今年の決勝戦の甲府西中戦もそうでした。

西中テニス部は季節部で、メンバーが6人しかいません。従って5試合全部を行うことは出来ず、1試合を「捨て」て4試合のうち3ポイントを取って勝ち進んできた学校です。逆に言えば、相手に不戦勝1ポイントを与えても勝ち進んで来られた粒の揃ったメンバー構成で、戦前から最大の敵と目してきた学校です。

本校には絶対のエースで主将の依田隼

斗(3年)がいます。県下一の実力を持つ依田であれば誰と対戦しても勝つことができるのですが、組み合わせによってその依田が不戦勝してしまうと、途端に本校は苦しくなります。そのため依田を始め、皆でさんざん頭を痛めた末の決勝のオーダーでしたが、蓋を開けてみればこれ以上は望めないような組み合わせとなり、結果的に勝利をつかむことができました。もともと、組み合わせが良かっただけでは勝つことはできません。勝利を確実に引き寄せることができたのは選手たちの力であり頑張りでした。そういった意味で、運も実力の内とも言えるかもしれません。

この県選手権大会は、夏に東京・有明テニスの森で行われる関東中学生テニス選手権大会(関東大会)の予選を兼ねており、更にこの関東大会で上位に食い込むことができれば全国中学生テニス選手権大会(全中)に進む道が開ける、いわば一年で最も重要な大会です。この県選手権で六連覇を達成できたということは、我が駿台甲府中学校にとっても誇るべき実績であり、毎年のように接戦を制して勝利をもぎ取ってきた、歴代の生徒諸君の努力の賜物です。来る7月7日の関東大会は非常に高いレベルの戦いになります。しかし、昨年あげた関東大会初の一勝を誇りに、一つでも多くの勝利を目指して頑張りたいと思います。

なお、5月3日に行われた県選手権個人の部においても、シングルスで依田が、ダ



ブルスで依田・嶋崎律己(2年)組がそれぞれ優勝を飾り、7月末に行われる関東大会個人戦に駒を進めたことを付記します。

吹奏楽部顧問 内山晶夫

わが校の吹奏楽部は、今年で創部8年目を迎えました。今年度新入部員が8名入部し、現在35名で活動しています。部の motto は、「皆の力を結集して和を奏せよう!」という意味の『奏和(そうわ)』。「総和」結集』を意味するM(シグマ)の記号を添えることもあり。この『奏和』を常に心に留めながら日々の練習に取り組み、部員たちには求めています。

部の大きな目標は、8月初旬に行われる「山梨県吹奏楽コンクール」(中学B部門、最大演奏人数30名)と12月中旬に行われる「山梨県アンサンブルコンテスト」(最大演奏人数8名)です。ともに日々の練習の成果である「普段力」とともに「奏和」の成果がシビアに問われます。

本校の特徴の1つは全員参加のクラブ活動。生徒が8つの運動部と2つの文化部、計10のいずれかに所属し、「文武共存」を合言葉に、可能性を広げ人間力を高めるための活動を行っています。吹奏楽部の活動は、コンクールをはじめ駿中祭などの様々なイベントでの演奏に向けて、月水金の「クラブの日」の放課後活動をメインとして、土日の練習や放課後延長部活での練習も行っています。

外部指導者の熱心な指導の下、クラブの体制も年々その充実度を増し、進化を実感できるようになりました。コンクールでは、楽器が全くの初心者である1年生を加えた3ヶ月足らずの練習で2年連続「銀賞」を獲得、今年は念願の「金賞・ゴールド」を目指し、『奏和』を合言葉に、意欲的に活動を行っています。ぜひご期待下さい!

合唱部顧問 中村圭世

合唱部は今年で創部8年目を迎えました。本年度は1年生女子が14名入部し、部員数は過去最多の男子4名、女子24名の総勢28名で、天明屋恵子先生のご指導のもと日々練習に励んでいます。本年度も、昨年までと同様に、山梨県合唱祭(6月)、NHK全国学校音楽コンクール(8月)、全日本合唱コンクール山梨県大会(8月)、山梨ヴォーカルアンサンブルコンテスト(2月)などに参加する予定です。また、6月に行われる駿中祭および駿高祭では、中高合同で発表する予定です。

今年、生徒たちが話し合って決めた目標は「一分一秒、手を動かさず、コンクール銅賞以上を目指し、団結して新たな歴史をつくる」です。生徒たちは、この目標をもとに自ら練習プログラムを考え、天明屋先生がいらいらしない日も、プログラムに従ってしっかりと練習をしています。私は、今年四月に中学校に異動となったばかりですが、中学生のこうした自立した姿にはしばしば驚かされます。

合唱部はコンクールでの入賞を一つの目標として頑張っていますが、2学期の大会がない時期には、老人ホームや保育園への訪問活動なども積極的に行っていききたいと思っています。私は高校でボランティアサークルの顧問をしていましたが、老人ホームや保育園を生徒達が訪問して歌を披露すると、とても喜ばれますし、また、生徒達も園児や高齢者から笑顔や「ありがどう」という言葉いただき、逆に力づけられています。コンクールで賞をとることももちろん重要ですが、歌を通して社会貢献できることや、歌を歌うことの別の喜びを生徒達には知ってほしいと思っていますし、そうした活動を通じて精神的にも成長してほしいと願っています。

小学校より

富士山の世界遺産登録

校長 石川 博

富士山が世界遺産に登録される見通しがあった。山梨県と静岡県が推薦書原案を作り、文化庁から提出され、イコモス(ユネスコの諮問機関)担当者の現地調査もあつて認められたのだが、納得のいく推薦書を作るまでのハードルはいくつもあった。

かつて自然遺産として富士山の登録を検討したが、それが不可能だと判断し、今回は文化遺産として申請した。「文化」の内容は、「信仰の対象、芸術の源泉としての山」である。富士山の芸術と言ったとき、まず浮世絵がイメージされるが、文学においても富士山は重要な題材だった。推薦書本文には、富士山は多くの日本文学を生み出した、と書いて、いくつか例を挙げればこと済むのだが、その後、富士山が登場する文学作品リスト、というようなものが必要であろう。三年ほど前、県からの委託を受けて、このリスト作りに加わった。万葉集から近代の詩歌・小説までを四人で分担してリストアップしたのだが、膨大すぎて本文の抜粋全てを印刷に付すことはできず、CDに収めた。私は江戸時代を担当し、とうてい網羅するには至らなかったが、それでも千点以上の作品リストとなった。

江戸時代以前から、富士山は日本一の山、という認識は広まっていた。しかし、多くの都人は実際に富士を見ることはなかったし、もちろん写真もないので、絵や文学作品から想像するしかなかった。平安時代や鎌倉時代の和歌の多くは、実際の富士を見ないで詠まれている。

それが江戸時代になると、江戸から見えたこともあり、ずっと親しい山になった。木花開耶姫(このはなさくやひめ)のイメージもあつて、「お富士さん」などと女性扱いされることも多い。「夏の富士」とは、化粧して

いない素顔を、雪をかぶっていない富士に例えた言い方で、今でいうスツピンのことである。和歌でも、実際の富士を見て詠んだものが増えてくる。狂歌や川柳においても格好の題材となった。また、宝永の大噴火(1707年)は大きな災害であり、恐ろしい山とも認識されていた。場面によって様々なイメージを持っていたのだ。

江戸時代後期には富士登山を試みる人も増えてきた。富士の偉大さ、神秘性、恐ろしさとともに、見るだけではわからない実像も文章に描かれるようになる。地元(現在の富士吉田)の方が記した「隔搔録」という書物には、「富士は下からご覧になるのがよい。実際に登ると糞尿だらけのきたない山だ」とある。また、賀茂季鷹(国学者)の「富士日記」には、山小屋で蚤に苦しめられたとの記述もある。それらを乗り越えるからこそ、頂上でのご来光をいっそう素晴らしく感じるのだろう。

想像の富士、外から見る富士、体験する富士、それぞれの相貌があり、関わる立場によって、「富士」の捉え方は変わる。学校というものも同じだ。世間が思う駿台甲府、保護者から見た駿台甲府、児童・生徒の駿台甲府、教職員にとつての駿台甲府。それぞれが多少異なっても、どれも本場の「駿台甲府」であろう。そして、富士同様、どの立場からも高く評価され、世界に認められるよう、存在感を高めたものだ。

若葉育つ五月

二学年主任 嶋田 顕

季節の移り変わりは早く、春から夏へ、周囲の木々には若々しい青葉が多く見られます。小さな蕾から芽を出し、花を咲かせ、これからぐんぐんと成長していこうとする若葉たちです。二年生となった子どもたちはこの季節の若葉に姿が重なります。一年生として立派な花を咲かせ終えた後、駿小生としてさらに成長しようと、『愛心』という学年の合言葉を胸に、日々、学習も遊びにも真剣に取り組んでいます。

特に五月は、学習の中でも特別な授業に多く取り組みました。まずは、GW前に行いました交通安全教室。一・二年生では毎年この時期に南甲府警察署の協力の下、交通安全教室を行います。今年も、ウサギとカメの昔話を元にしたアニメを見ながら、楽しく交通ルールを学びました。昔話の通り競争を始めたウサギとカメでしたが、そのコースは車が多く通る危険な街の中で；という話で、危険な目に合うウサギとカメが助けられる度に大盛り上がり。その中でも、なぜ危険なのか、どういうところは注意しなければいけないのか、理由や考えを述べる子どもたちの姿に昨年とは違う成長の様子を感じました。

続いて行いましたのが、地域探検。昨年の地域探検とは方面も変わり、何よりも子どもたち自身の足で探検する大きなチャレンジとなりました。南甲府警察署・甲府商業高校・山城小学校・JA山城支所を各班が地図を片手に、協力し合い、見学して回りました。学校を出発するときは各班、どちらの方向へ進んでいいのやら、不確かな足取りで進んでいく姿に不安を感じました

が、各見学場所へ到着する度に自信を深め、事前学習の中で考えてきた内容を元気よく質問する様子が見られました。

学校へ到着した子どもたちの表情には、無事にゴールできた安堵とやり遂げた達成感が溢れていました。交通安全教室で学んだ交通ルールも大いに役立つ様子でした。



先日は、授業参観と親子レクも行いました。日曜日に行いました参観には多くの保護者の方々に参加いただき、授業《参観》ではなく授業《参加》と位置付けて行うことができました。授業では、子どもたちが保護者の方々を観察し、気が付いたことや感じたことを思い思いに発表し、各自が観察名人になることができました。どの保護者の方のことを指して言っているのか、クイズ感覚で聞く力も育てることができました。親子レクでは、子どもチームと大人チームに分かれ、あいこじゃんけんやじゃんけんボーリングで沢山触れ合い、終わりの紙飛行機大会では親子で協力しながら紙飛行機を作成し、飛ばせたことは子どもたちにとつても、良い思い出となりました。

このような多くの体験を通じながら、少しずつ、確実に若葉は大きく成長しています。この一年間を終えるころには、大きな枝葉となっていることを楽しみに、次は六月の校外学習【郵便局・遊亀動物園見学】に向けて準備を進めていきます。

2013年度 県高校総体の記録

《学校対抗総合得点》

男子総合 第5位 (23点)
女子総合 第7位 (14点)

県高校総体をふり返って

生徒会顧問 影山正美

今年も陸上競技場正面前にテントを張りました。左右が甲府工業と甲府商業の市内伝統校で、やや緊張した三日間となりました。裏話をしてあげば、テントの場所は前年度中に決めます。総合順位の上位から選ぶことになっており、男子の準優勝校らしく目立つ位置に立とうということで、本校は甲府工業の隣を希望したのです。

さて、生徒会本部の仕事は開会式・閉会式への参加と、他校との交流でした。

開会式の入場行進は、例年と同じく野球部員にお願いし、それに本校教員(校長を含め四名)と生徒会役員が加わり、昨年度の男子準優勝楯を返還しました。閉会式は生徒会役員だけの参加で、表彰式を兼ねたものです。結果は、男子は団体総合で五位、女子は第七位(表彰は六位まで)でした。来年は、男女ともに六位入賞できるような、がんばっていただきたいと思えます。実現すれば、本校史上初めての快挙となります。

交流は各校の生徒会誌の交換です。本校の『ペリパトス 十八号』(二〇一三年三月一日発行)を差し上げ、三十数校からいただ

きました。それぞれの学校ごとに工夫された個性ある冊子に仕上がっており、学校内部の様子がよくわかります。

各部の戦績(団体・個人)の詳細は、『生徒会通信 三号』(五月十七日発行)に掲載しました。五月末に西館一階フロアで、「二〇一三 総体ギャラリー」(生徒会本部・写真部共催)を開き、優勝カップや賞状、他校の生徒会誌、写真部の作品など展示しました。

【各部の結果】

— 男子 —

〔ハンドボール部〕

《優勝》 総体得点 **5点**
 準々決勝 対 甲府一 43対17
 準決勝 対 都留 45対8
 決勝 対 塩山 39対10

関東大会出場

〔ゴルフ部〕

《優勝》 総体得点 **2点**
 (団体戦) 1位 望月健太郎
 (個人戦) 2位 功刀貴昭

〔陸上競技部〕

《準優勝》 総体得点 **7点**
 100m 1位 小田遼太 (2A)
 7位 浅利 拓 (3F)
 200m 1位 小田遼太 (2A)

400m 3位 渡邊黎旺 (2D)
 3位 渡邊黎旺 (2D)
 4位 清水隼人 (3C)
 5位 深沢 和 (3A)
 8位 小林若葉 (3F)
 1位 青柳 至 (3C)

800m 1位 浅利、清水、深沢、小田
 4×100m R 1位 浅利、清水、深沢、小田
 4×400m R 1位 渡邊、清水、小田、深沢

走幅跳 2位 山下 黎 (2A)
 3位 奈良光洋 (1A)
 4位 浅利 拓 (3F)
 8位 渡辺竜麻 (2A)
 3位 山下 黎 (2A)
 1位 山下 黎 (2A)

三段跳 3位 渡辺竜麻 (2A)
 やり投 2位 渡辺竜麻 (2A)
 八種競技 1位 山下 黎 (2A)

※大会新
 ※小田遼太 (2A) が個人・リレーで4冠達成!!

2位 渡辺竜麻 (2A)
 5位 奈良光洋 (1A)

200m 背泳ぎ 6位 米山太志 (1A)
 500m 平泳ぎ 6位 石山敦也 (2F)
 2000m 個人メドレー 4位 海野未来 (1H)
 4000m リレー 6位 多田、田川、海野、米山

8000m リレー 6位 田川、海野、多田、米山
 4000m メドレーリレー 4位 保、海野、田川、多田

〔テニス部〕
 《3位》 総体得点 **3点**
 (団体戦) 2回戦 対 日大明誠 3対0
 準々決勝 対 市川 2対0
 準決勝 対 山梨学院 0対2
 3位決定戦 対 甲府工 2対0

(個人戦 シングルス) 吾妻進也 ベスト8

〔バレーボール部〕
 《4位》 総体得点 **2点**

2回戦 対 甲府西 2対0
 準々決勝 対 谷村工 2対1
 準決勝 対 航空 0対2
 3位決定戦 対 日川 0対2

関東大会出場

〔水泳部〕

《5位》 総体得点 **1点**

500m 自由形 7位 多田隆亨 (1A)
 1000m 自由形 7位 多田隆亨 (1A)
 2000m 自由形 6位 田川浩太郎 (3A)
 4000m 自由形 5位 田川浩太郎 (3A)
 500m 背泳ぎ 1位 保 暁人 (2C)
 1000m 背泳ぎ 1位 保 暁人 (2C)
 2000m 背泳ぎ 6位 米山太志 (1A)
 3000m 背泳ぎ 3位 海野未来 (1H)
 500m 平泳ぎ 6位 石山敦也 (2F)
 2000m 個人メドレー 4位 海野未来 (1H)
 4000m リレー 6位 多田、田川、海野、米山

8000m リレー 6位 田川、海野、多田、米山
 4000m メドレーリレー 4位 保、海野、田川、多田

〔卓球部〕
 《7位》 総体得点 **2点**

(団体戦) 2回戦 対 明誠 3対0
 3回戦 対 笛吹 3対1
 準々決勝 対 航空 0対3
 5位決定戦 対 葦崎 1対3
 7位決定戦 対 甲府一 3対1

(個人戦)
シングルス

芦澤輝彦(2G) 3回戦進出
内田涼介(1G) 3回戦進出
ダブルス
櫻本・荻沢組 4回戦進出
内田・萩原組 4回戦進出

〔ソフトテニス部〕

《ベスト16》

(団体戦)
1回戦 対 峽南 3対0
2回戦 対 甲府西 1対2
(個人戦)

若月南(2A)・白井慶史郎(2H)

ベスト16

※若月・白井組 関東大会出場

〔空手道部〕

(団体組手)

準々決勝 対 市川 1対3

(個人形)

2位 深沢拓椰(3G)

※深沢拓椰は個人形で関東大会出場

〔サッカー部〕

1回戦 対 甲府南 2対1
2回戦 対 航空 2対7



〔剣道部〕

1回戦 対 東海 0対4

〔バスケットボール部〕

1回戦 対 巨摩 38対100

〔バドミントン部〕

1回戦 対 葦崎 1対3

―女子―

〔水泳部〕

《2位》 総体得点5点

500m自由形 3位 植松里菜(2D)
1000m自由形 2位 岩本紗希(2A)

3位 岩間千花子(1A)
4位 小西麻友(1A)
4位 植松里菜(2D)
2000m自由形 1位 岩本紗希(2A)
3位 岩間千花子(1A)

500mバタフライ 1位 小西麻友(1A)
1000mバタフライ 2位 日原果歩(3A)
2000mバタフライ 1位 日原果歩(3A)
1000m背泳ぎ 2位 小松あい(1H)
2000m背泳ぎ 2位 小松あい(1H)
2000m個人メドレー 1位 小松えり(3B)

4000m個人メドレー 1位 小松えり(3B)
4000mリレー 2位 小松、小西、岩間、岩本
4000mメドレーリレー 2位 小松あい、小松えり、日原、岩本

〔陸上競技部〕

《2位》 総体得点5点

1000m 1位 寺本有那(3A)
4位 小松さくら(1G)
1位 寺本有那(3A)
4位 小川詩織(3B)

4000m 1位 寺本有那(3A)
5位 小松さくら(1G)
800m 1位 白倉若奈(2A)
1000mH 2位 山岸花陽(2A)
4000mH 1位 小川詩織(3B)
5位 小林里帆(1A)

4×1000mR 1位 白倉、寺本、小川、小松
4×4000mR 1位 白倉、小川、山岸、寺本

走幅跳 3位 藤本真優(2H)
七種競技 1位 藤本真優(2H)
5位 中澤美結(2A)
8位 井上萌花(1A)

※寺本有那(3A)が個人・リレーで5冠達成!!

関東大会出場

〔ハンドボール部〕

《準優勝》 総体得点3点

2回戦 対 甲陵 52対8
準決勝 対 山梨 21対17
決勝 対 日川 21対24

関東大会出場

〔テニス部〕

《ベスト8》 総体得点1点

(団体戦) 2回戦 対 塩山 3対0
準々決勝 対 甲府一 0対2
(個人戦)

シングルス 森 香音(3C) ベスト16
興水未沙貴(3A) ベスト16
ダブルス 興水・中込怜花(2G) 組
ベスト8

〔バレーボール部〕

1回戦 対 富士学 0対2

〔ソフトテニス部〕

1回戦 対 甲府西 0対3

〔バスケットボール部〕

1回戦 対 明誠 49対112

〔バドミントン部〕

1回戦 対 都留 0対3

〔卓球部〕

1回戦 対 笛吹 1対3

〔剣道部〕

1回戦 対 城西 0対5

中学校より

【教科からのコメント】

国語科 出澤郁美
私は、駿中の国語教育の特色と、高校までにしてほしいことについてお話しします。

駿中では、毎週小テストと、長期休暇後に五〇問テストを行うことで、漢字の定着を図っています。漢字練習の課題、再試験も行っています。また、文章力向上と書くことへの抵抗をなくすために、行事の後に作文を書きます。教科書に掲載されている古文は、内容を深めて高校へのステップとなるようにしています。中学三年生になると、文語文法を学び、それを踏まえた上で授業が行われます。高校での負担を減らすことにより、文法嫌いをなくすことに繋がればと考えています。この他に週に一回の読書活動を通じて活字に触れる機会を、現代文では予習プリントを用いて言葉の使い方や意味を知る機会を作っています。

しかし、これだけでは総合的な国語力アップにはなりません。何事も、知りたい、学びたいと思うことから学習活動は始まり、記憶も定着します。つまり、生徒自身が興味を持って新聞を読んだり、読書活動をするにより、読むスピードが上がったり、読解力が養われたり、語彙を増やすことが出来ます。興味を持つきっかけは人それぞれですが、尊敬する人、好きな人の読む本には興味があるものでしょう。ですからお家でも、お父さん・お母さんが読書活動をし、お子様に本を推薦して頂いたり、同じ映画を見たり、同じ活動を行うことで感想を述べ合ったりすることから、お子様の興味関心の枠を広げる機会を作って頂けたらと思います。

国語は沢山の文章を読むことによりセンスが養われます。上手な文章を書く人は、上手な言い回し、自分の気持ちをはっきりと表す言葉を知っているということです。沢山の本を読み、素敵な本に出会うことで培われたセンスを自分の血や肉にして、その鍛えた体で大学受験という戦いに挑んでほしいと考えています。

数学科 坂本哲雄

中学で学ぶ数学は、小学校の算数の続編になります。よく算数と数学の違いについて聞かれることがあります。私は次のように答えることにしています。「算数は答えを出すことが中心の教科。数学は答えも大切だけど、その答えにたどり着くまでのプロセス（過程）が中心テーマの教科。」もう少し補足しますと、算数で答えを出すのに使われる式がありますが、通常、小学生は「なぜ、その式を使うと答えになるのか」は特に考えることはあまりないと思います。つまり結果重視です。正しい答えが出るから、それで良いのだと考えていることでしょうか。しかし、数学はそれでは困るのです。その式を使うとどうしてうまく答えにたどり着くのかを説明できなければいけないのです。それは同時に第3者を説得する上での大事な説明になるわけですが、数学ではそれを「論理」と呼んでいます。言い換えると、数学は論理を駆使して得られる結論を正しい結果として認める教科なのです。そういう意味で中学で学ぶ数学は小学校の算数とはえらく違います。しかし、いきなり論理を導入すると生徒はパニックに陥ってしまいますので、教科書はうまく、じわじわと数学の世界に無理なく入って来られるように導入および構成されています。このときに1つだけ気を付けなければいけないことがあります。それは具体例の素材・

内容があくまで生徒がよく熟知しているものが多いので、あえて学ばなくてもいいやと思ってしまうことです。数学では算数と違い、身近な世界から抽象的な世界に移行していくので、その具体例としてわかりやすく説明するために、生徒がよくわかっている素材・内容を用いるのです。中学校の最初の1年間で、算数から数学への自然な無理のない移行措置が本校ではとられています。それはハードウェアというより、ソフトウェアである数学科の教員の指導力という形で具現化されています。そして中学2年生からは、より高度な論理過程を学んで行くこととなります。したがって、本校の3年間で学んできた数学は、高校へ進学してからも自然な形で受け継がれ、中学数学と高校数学のギャップを極力なくしていく形になっております。（これは実際に一般中学から駿台甲府高校に入学した生徒と比較してみると一目瞭然と言えますし、中高一貫の強みと言えるところです。）

理科 内山晶夫

駿中の理科と言えば「実験！」とまで言われるくらい、実験や観察が多いのが本校の理科の特徴と言って良いでしょう。それほど、本校では実験・観察を重視しています。様々な自然現象を実際に自分の目で確かめ、教科書に載っている学習内容を体験を通して納得・理解しながら、感動を伴いつつ、科学の目や好奇心、思考力を育てていきたいと願っています。

たとえば池の水1滴の中にも、顕微鏡で見ると微小生物たちの驚異の小宇宙が広がります。生徒たちは驚きの声を上げながら、飽くことなく顕微鏡を見続けます。そうして身近なものにも多くの発見があることを実感し、自然を理解する能力や精神が育まれていくのです。3年間での生徒実験の回数は、90回を超

える回数にもなります。また、本校では、使用頻度の高い顕微鏡、ガスバーナー、駒込ビペット、メスシリンダーなどの実験器具の正しい使い方や、電気回路の制作の実技テストを行っています。これらの高い実験技術の修得により、駿高では他校からの進学者よりも倍近い速さで実験をやり遂げるほどの力にもなっているのではないかと考えています。

また、それらの体験が様々な問題を解く力にもならなければなりません。体験を通して学習したことが、駿台甲府高校での学習や大学入試、さらに社会に出ても役に立つように、実験内容を厳選し、教科書に載っていない発展的な実験や学習も敢えて行います。教科書に載っていない内容であっても、理解する上で大切なことは学ぶ。それが駿中の理科の理念です。駿中生は公立中学校よりもはるかに多くのことを学びます。

昨年度の科学の甲子園山梨県大会で駿中出身者が多数を占めるグループが1位と3位を占め、駿高が全国大会への出場を果たしましたが、彼らの駿中での理科の学習活動が、その成果に少なからず寄与しているものと自負の念を抱いている次第です。これからも独自の理念に基づいた駿中の理科の教育活動を力強く実践していきたいと思えます。

社会科 柿澤喜英

社会科というと、暗記科目というイメージを持つ人が多いように思います。そのため、暗記が苦手な生徒を中心に、社会が苦手（あるいは嫌い）という声があるのも事実です。しかし、社会科の本質は「暗記」ではありません。社会科の本質とは「自分が身に着けた知識や知恵を実社会で、どのように活かしていくか」という点にあるのだと思います。つまり、知識を「暗記する

力」を身につけるのではなく、知識を使って「考える力」を身につけることが、社会科を学ぶ意義であると我々は考えています。そのため、本校では、生徒自身の「考える力」を養うため、通常の授業以外にもさまざまな取組みを行っています。それを以下に簡単に紹介したいと思います。

1年次では、CSの実験考古学において「縄文土器作り」と「勾玉作り」を実施しています。また、夏休みの課題として山梨県が主催する「統計グラフィコンクール」にも参加しています。2年次では、夏休みの課題として「遺跡レポート」を行っています。自分の住んでいる市町村に現存する遺跡を紹介するという課題です。3年次では、「新聞感想文コンクール」(山梨日日新聞主催)、「新聞スクラップ」、「模擬裁判」といった、政治分野を意識した取組みを行っています。「新聞感想文コンクール」、「新聞スクラップ」は、新聞を教材とするいわゆるNIE教育の一環としても行っていますが、駿高1年生が朝日新聞主催の「新聞スクラップコンクール」に参加していることもあり、非常に意欲的に取り組んでいる生徒が多く見受けられます。また、「模擬裁判」は2009年より裁判員制度が導入されたことをきっかけに、本格的に取り組み始めたものですが、甲府地方検察庁や山梨県弁護士会の協力のもと、実際の検察官や弁護士の方に来校していただいております。

近年、「統計グラフィコンクール」や「新聞感想文コンクール」での上位入賞者も増えてきており、また、昨年度は駿中出身者が朝日新聞主催の「新聞スクラップコンクール」で全国最優秀賞を受賞しました。今後も、このような取組みを通じて、生徒の「考える力」の向上を目指していきたいと思っています。

保健体育科 齊藤昌一

保健体育は、とても真剣に取り組む生徒が多いです。体育と保健の二つの分野があり、内容は高校と協議をしながら中学校の行事実施状況を考慮しています。体育目標は、心と体を一体としてとらえ、運動や健康・安全についての理解と運動の合理的な実践を通して、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育てるとともに健康の増進のための実践力の育成と体力の向上を図り、明るく豊かな生活を営む態度を育てることです。

一・二年は、運動の楽しさや喜びを味わうことができるようにすることであり、体力を高め、心身の調和的発達を図り、公正に取り組む、お互いに協力する、自己の役割を果たすなどの意欲を育てるとともに、健康・安全に留意し、自己の最善を尽くして運動する態度を育てる。三年は、一・二年を踏まえた上で、知識や技能を高め、生涯にわたって運動を豊かに実践することができるようにすることであり、自己の状況に応じて体力の向上を図る能力を育て、心身の調和的発達を図り、自己の役割を果たすなどの態度を育てるとともに、健康・安全に留意して運動する態度を育てる。保健目標は、個人生活における健康・安全に関する理解を通して、生涯を通じて自らの健康を適切に管理し、改善していく資質や能力を育てることです。

体育の内容は、スポーツテスト、集団行動、体づくり運動、器械運動(一・二年)、陸上競技、水泳(一・二年)、球技(バレーボール・バスケットボール、ハンドボール、ソフトボール、フットサル)、武道(一・二年)(剣道)、ダンス(一・二年)、体育理論(一・二年)を行っています。保健の内容は、心身の発達と心の健康、健康と環境、障害の防止、疾病の予防を理解であり、日常生活に直結した内容です。

生徒たちは体育授業が変更で他教科になるととても不満そうです。運動のときに係わらず、グラウンドや体育館で汗を流すことはとてもよいことであり、保健を学ぶ姿勢も旺盛です。

今後も授業内事故に気を付け生徒の心身の向上を図って参ります。

英語科 鹿山とまり

私の英語嫌いは、小学校1年生のときに始まった。私の中では、「apple事件」として何時までも忘れられない記憶として脳裏に焼き付いている。当時では珍しく英語を習っていた私は、カナダ人の先生から「apple」は「リンゴ」であること、発音は「アポウ」(昔実在したあるプロレスラーが挨拶するように)であることを習い、それを信じて疑わなかった。ところが、事件は学校のトイレで起こってしまった。「apple」を「アポウ」という私に対し、「アップル」だと主張して譲らない子とケンカが始まったのである。当然のごとく私に加勢してくれる子は誰一人いるわけもなく、泣く泣く「アップル」と言わされた。当時の小学生の間では「アップル」が世間一般の常識であったことには間違いないのだが、その日を境に二度と友達の前で英語を口にすることは無くなった。

自ら英語を封印したまま晴れて中学生になった私は、それでも英語は多少なりとも「できる」自信があった。初めて迎える中間テストでは、アルファベットや This is a pen. の類が範囲であったので、100点を取れる自信はあったし、当然自分でも100点だと思っていた。答案返却の時間がやってきた。周りの友達も100点に顔がほころんでいる中、いよいよ自分の順番がやってきた。がしかし、99という数字が目飛び込んできた。一ヶ所ピリオドを付け忘れたため1点減点されていたのである。

頭の中が真っ白になり、その後どうやって帰宅したのか記憶にない。私の英語嫌いはますます加速した。その後いろいろな事件は起きるのだが、続きはまた機会があればお話ししたい。そんな私が今、英語を教えているのだから人生何が起るかわからないものである。

英語科 Murrell Craig Alexander

English is a global skill.
English is spoken all over the world. It is the 2nd most spoken language in the world (Chinese is #1), and it is the MOST spoken 2nd language. This means you can travel to almost any country in the world and you will find people who can speak English. This makes English a very useful skill to have in the 21st century.

The world is getting smaller. Technology and business are bringing people together more and more. Japan will need to be part of this global community in the new century, so English will be more important than ever before.

This is why some companies like Rakuten and Uniqlo have announced that English is their main language, even though they are Japanese companies. They realize that using English will make them competitive in the world of tomorrow.

小学校より

各教科のねらい

基本からじっくりと学ぶ

国語担当 大塚 絢子

国語では四つの分野を学習します。学習や日常生活など、すべての基礎となる教科なので、じっくり時間をかけて指導します。

「話すこと・聞くこと」では、教科書の内容に加え、日常の様々な場面での、話し方・聞き方を学習します。話し言葉も「友達と話す時」「先生や目上の人と話す時」などで使い分けることを身に付けます。

「書くこと」については、一年生でひらがなを書くところから、正しい鉛筆の持ち方、書くときの姿勢など丁寧に指導します。「あのね帳」で日常のこと、自分が感じたことをつづりながら、少しずつ長い文章にも挑戦していきます。高学年になると、決められた字数でテーマに沿った内容を書く課題にも取り組みます。これは、中高生における小論文の基礎になります。

最後に「読むこと」です。高学年では、教科書以外に駿台フロンティアジュニア（駿台予備学校の小学生部門）のテキストにチャレンジし、読解力を養成します。また本校では、一校時の前に「朝読の時間」を設け、低学年では教員による絵本の読み聞かせを行い、三年生以上は一人ひとりが自分の選んだ本を読みます。短い時間ですが、本と触れ合い、読書に親しむひとときです。図書室の利用も奨励しています。読書を通して、子どもたちの視野が広がり、また読書の習慣が身に付いていくのです。

百人一首を楽しみながらたくさんの古語や文法を自然に身に付けます。将来本格的に古文を学ぶときの基礎力になります。

算数力向上を目指して

算数担当 山下 潤

本校では、開校当初より課外授業と呼ばれる放課後活動の中で、国際算数検定や和算と呼ばれる問題に取り組んできました。

また、駿小オリジナルの計算プリントや始業前の百マス計算などで計算力や思考力を高めてきました。現在は、これら以外に駿台フロンティアジュニアという全国の中学校受験者が使用しているテキストを五年生から導入し、授業の中で教科書と並行して取り組んでいます。奇問・難問ではなく、良問にアプローチします。また、中学校とも連携し、進学を見据え、内容の精選を行うことで、無理なく取り組めるシステムを構築し、駿台グループ、小中高一貫校であるメリットを活かした授業を行っています。

小学校では今年度から、より子どもたちの興味関心や思考力が高まるよう、算数に重点を置いた取り組みをスタートさせます。数の概念や計算の基礎基本の部分を大切にしながら、思考力、想像力、忍耐力がつかうような授業、教材を研究し、教員の指導力向上にも繋げたいと考えています。子どもたちのチャレンジ精神や自ら学ぼうとする向上力は無尽大です。駿小に赴任した時、難しい問題になると、子どもたちの目の輝きがさらに増して問題を解き始め、解けないと本当に悔しそうにし、解説に耳を傾ける姿に、目をみはりました。一般の塾や小学校とここまで子どもたちの反応が違うのは、しっかりと系統的に学習しているからだと実感しました。このような学習体系をより強固なものにし、今の状態に満足せず、更なる「算数力向上」を目指します。

今を生きるために必要な学び

社会担当 筒井 雅美

社会科は3年からはじまりますが、1、2年生でも生活科の地域探検などで、身近な仕事や場所について学びます。3年生では、地図にふれ、地図記号や等高線を知ります。いくつ都道府県があるか、山梨県はどこにあるか等、発見の連続です。4年生ではダムや浄水場で水の旅を体感し、ごみ処理場の巨大クレーンで持ち上げられる大量のごみに歓声をあげながら、くらしを支える仕組みを学びます。

5年生になると、農業・水産業・工業・環境の分野において、未来を担う子どもたち自身が「日本人」として「地球人」としての視点を持ち、日本全国だけでなく、世界、地球全体の現状・課題を学びます。

そして6年生。『歴史はロマンだ！』を合言葉に縄文時代から現代までの歴史を学習します。歴史は暗記ではありません。歴史事象の全ては原因と結果。因果関係で成り立っています。「□□だったから△△になったのか！」という歴史の一事象に隠されたロマンと共に学習します。

そして究めつけが、奈良・名古屋方面への修学旅行。教科書に載っている歴史的な建造物や作品を実際に見ます。法隆寺を散策し、東大寺の大仏を見上げて、当時の人々の苦労や喜びを想像し、考えることこそ歴史の醍醐味！面白さだと思います。この感覚を味わったら、中学高校でも決して歴史は苦手になりません。

公民分野では、社会を生きる一員として今、社会が抱える問題（憲法・外交等）に関心を持ち、考える力を育てています。

小中学生に理科を教えて

理科担当 田中 愛子

物事に疑問を感じ、不思議と思い、それを解きほぐしていく楽しさや喜びは、子どもたちが本来持っている力です。だから、小学生のほとんどは、「理科が好き」「実験が楽しい」そう答えます。駿中に一般小から入学した生徒の多くも「駿中の理科は実験の回数が多く、内容にも興味があったので受験を考えた」と話してくれました。そんな駿中生たちも、学年が上がるにつれて「理科が難しくて解らない」と、理科学習に対する関心や意欲が徐々に低下していく者が増えます。原因は、より専門的になる中学理科を学習するための「科学的な思考力」が小学時代に、確実に習得されていないからだと、私は考えます。

では、駿小の理科は何に重点を置き、科学的な思考力を鍛えていくか。まず、「子ども自身が見通し・目的を持ち、より多くの観察や実験を行う」ことの大切さを重視します。できる限り本物に触れること、その単元で解決すべき課題を意識して取り組むことで、確かな理解につながります。次に何を行うのか指示を待つのではなく、自分で主体的に活動することができるようになります。そして、自分の考え（観察・実験の結果から得た結論）を、自分の言葉でまとめるノート作りの工夫を指導します。すると、自信や確信を持って発表できることにもつながり、問題を解決する楽しさや満足感を味わえるのです。特に高学年の理科では、中学理科の導入となるよう意図的に授業内容の幅を広げ、進学の期待感を高めるよう発展的な授業を行っています。

駿小の「英語」について

英語担当 有野 眞紀子

今、日本では、国際化社会で活躍できる人材の育成に向けて、英語教育に関わって様々な動向が見られます。高校では英語の授業を英語だけで展開したり、中学校で習得する英単語の語数を増やしたり、小学校でも英語を正式な教科にする提言が出されたりしています。どれも、コミュニケーションでできる英語力を目指しています。

駿小では、開学当初からネイティブスピーカーによる「英語」の授業を行っていました。コミュニケーションを重視した英語学習です。現在、1・2年生は週3回、3・4年生は週2回、5・6年生は週1回行っています。各学年とも系統的なテキストと日本の小学生の生活に合った英単語が提示されているワードブックを活用しています。また、ネイティブでない指導が難しいフォニックス（綴り字と発音の関係の学習）のテキストも使用しています。これらの教材をベースに、歌やゲームも取り入れながら、英語だけで授業を進めていく中で、子どもたちは、自然と英語を聞く耳が育っていきます。また、英語でコミュニケーションすることを楽しんでいきます。

5・6年生には週1回「外国語活動」の時間もあります。駿小では、駿中の英語科の教員が担当し、これまでのネイティブの授業で学んだことを生かしながら、中学校の英語の授業にスムーズに移行できるように取り組んでいます。こちらも、コミュニケーション能力の育成を重視し、英語で会話する授業を展開しています。

どちらも子どもたちには楽しい時間です。

農園体験「つくし村」

つくし村担当 齊藤 隆一

学校農園「つくし村」では、多種類の作物を育てています。じゃがいも、とうもろこし、大根、にんじん、さつまいも、里芋、落花生、なす、ピーマン、玉ねぎ、長ねぎ、ほうれん草、大豆、小松菜、チンゲン菜、かぶ、ズッキーニ、ミニトマトなど、様々な野菜やイモや豆がつくし村を彩ります。あたたかい土に触れながら、種をまき、水をやり、雑草を取り、間引きをし、丹精込めて野菜を育てます。同じように育てても、一つひとつ大きさも形も違うことがあります。でも、その野菜を収穫するときには、子どもたちの笑顔が弾けます。

自分たちで育てた野菜を食べる体験は、素晴らしい「食育」になります。実際に「苦手だったピーマンをおいしく食べる」ことができた。「トマトが好きになった。」など、毎年様々な声が聞こえてきます。

他にも、「大根の種を初めて見た。」「にんじんの葉っぱの形がわかって良かった。」など、普段、スーパーで売られている野菜の姿しか知らない子どもたちにとっては、畑で種から育つ野菜の姿が新鮮に映り、日々興味深そうに観察しています。

また、1・2年生は生活科の授業の中で、三・六年生は希望者が、田んぼで田植えや稲刈りを体験します。毎日食べているお米を作る体験は毎年大好評です。

みんなで協力して行う農作業は、子どもたちにとって素晴らしい時間です。これからもたくさんさんの体験をして、自然や食べ物への感謝の気持ち、命への慈しみなど、多くを学び、大きく成長するでしょう。

学校体育から生涯スポーツへ

体育担当 興石 純一

本校児童の将来の夢。医師や看護師などを目指している子どももいれば、サッカーや野球の選手になりたい子どももいます。

選手を目指す子どもは、もつとハードに体育の授業やクラブで指導してほしいとの気持ちもあるでしょうが、学校体育の役割は、幅広く運動の経験を積み、心身ともに健全な成長を促すことです。幅広く運動を経験することは、将来選手にならなかつた子どもにとっても、その後の生活をより豊かにしてくれる一つのツールになるでしょう。

本校では、まず、基礎的な体力の向上を目標とした活動をしています。今年度より、リフレッシュタイムの時間に「チャレンジアップ」という活動を取り入れました。児童みんなでグラウンドに出て長めの距離を走り、体力アップに励んでいます。その他にも、1年生から6年生までの縦割りの4つのチームに分かれ、簡単なボールゲームなどに取り組んでいく予定です。基礎的な体力の向上に加えて、こうした活動が異年齢の集団とのコミュニケーションの場にもなるだろうと考えています。

また、それぞれの学年の授業でも、体力向上や運動能力を高めることを目的としたものを積極的に取り入れています。週3回の体育の授業の中で、持久走やストレッチなど、簡単な運動を継続して行っています。

今年度よりロンドン五輪日本代表・三井（佐野）夢加先生を迎え、今まで以上に楽しく体育を学んでいます。今後も、運動能力の基礎基本が確実に身につけられるように、日々の授業に取り組んでいきます。

想像力・思考力の育成を目指して

図・音・家・囲将担当 花輪 美樹

【図工】落ち葉や木の実を拾って工作したり、季節を感じながら春をスケッチしたりと、四季を活かした授業を展開しています。高学年では、高校から美術の先生を招き、より専門的なアドバイスを受けながら創作活動に取り組んでいます。また、自らの作品だけでなく、友達の作品のよさや美しさに気づける心も大切にしています。

【音楽】秋に行われる校内音楽発表会では、各学年様々な工夫を凝らし、力のこもった発表となります。授業では専門家による生演奏や鑑賞会の企画など、低学年から本物の音楽に触れる経験をする中で芸術的な感性を養っていきます。

【家庭科】5年生からの授業です。畑で育てた大豆を原料にして、味噌を仕込み、1年後にはその味噌を使って調理します。みんな育て、作ったものを味わうことの素晴らしい実感します。衣食住にとどまらず、家族の形態や健康などについても学ぶ、将来に向けて大事な教科です。

【囲碁・将棋】週一回の授業は4年生まで（5・6年は授業内クラブで）。じっくり対戦し、思考力・判断力を養います。時には、専門家の手ほどきを受けながら、次の一手を考えます。児童からは、「集中力がアップした」との声も聞かれ、無言の対戦という経験が、他の授業でも活かされています。

このように、子どもたちは様々な体験的な学習にチャレンジしています。幅広い知識と想像力を養い、感性を磨きながら、興味関心を惹きつけることで、児童自身が益々学ぶことの面白さに気付きます。